

保育における相互性

榎沢 良彦

はじめに

保育や教育は、身体的にも知的にも精神的にも勝っている大人が、未熟で幼い子どもを保護し教育する営みです。すなわち、そこには「優—劣」、「強—弱」というような、不平等な関係が存在します。そのような関係が前提とされるので、「保護する者」と「保護される者」、「教える者」と「教えられる者」の役割分担が確定され、私たちは、大人は保護し教育する者であり、子どもは保護され教育される者であることを当然なことであると思っています。こうして、大人と子どもの関係が、一方的で片務的な関係であるかのように思われています。確かにこういう一方的な関係は存在するし、保育や教育が成り立つためには必要でしょう。しかし、それは一つの側面にすぎません。

日常性を凝視してみると、私たちが片務的であると思っている保育のなかには、相互的な関係とか同索性というものが潜在していることに気づきます。例えば、吉

田章宏氏は、大人は子どもを見下しがちで、子どもの「教師への敬意」は当然だと考えているけれど、優れた教育実践者は「子どもへの敬意」を抱いており、それが彼らの実践を支えていることを例を挙げて指摘しています。⁽¹⁾このような、大人と子どもの通常考えられているのとは逆の関係は、日常の生活のなかにも存在しています。保護しているはずの大人が、保護することを通して、逆に子どもを支えらけるとすれば、両者は相互的な関係にあることになります。この相互的な関係（それを「相互性」と呼ぶことにしますが）は日常性のなかに潜在しているので、普段はあまり自覚されたり意識されたりすることはないのですが、実は、これが保育、教育、子育てなどを支え、その質を規定しているのです。

私たちが保育に潜在している相互性に気づき、自覚することは大きな意味を持ちます。なぜなら、そのことにより私たちの視野が広がるわけです。保育というものがこれまでとは違ったように見えてくるからです。そこで、本稿では、保育のなかに存在している相互性について

考えてみたいと思います。特に、保育者が暗黙のうち
に実現しようとしている相互性を明らかにしたいと思
います。

一、砂遊びをめぐる起きた対立

一九九六年六月二九日、四歳児の子どもたちが担任の
N先生と砂場で遊んでいました。そこで、次のような出
来事が起きました。

場面一 悪者にされるS夫

K夫たちが砂場で遊んでいる。そこにS夫がやって来
て、砂山を両手で触って遊びはじめる。触っているうち
に砂山の一部が崩れてしまった。それを見たK夫が泣い
てS夫を非難する。S夫はわざと砂山を崩したのではな
いが、K夫が泣きだしたので罪悪感を覚えたのか、逃げ
だすように去っていく。そのS夫をN先生が捕まえて連
れ戻す。S夫の顔から「真面目な表情」が消え、S夫は
わざと「おどけた仕草」をする。まるで、N先生の真剣

な態度と視線をはぐらかし、茶化すようだ。N先生はS夫にK夫の話を聞かせようとするが、S夫は隙を見ては逃げていこうとする。そのため、どうしてもN先生がS夫をつかまえることになる。

N先生はK夫を励まして、砂山を造りなおさせようとする。S夫はわざと砂山の周辺を歩き回っては邪魔をする。K夫はS夫に対して、金切り声で「入らないで」「入っちゃだめ」と叫んで拒否する。S夫はなおさら砂遊びの場に入っていく。そのため、N先生は「ああ、Sちゃん、知っているのに入って」と、やんわりではあるが、S夫の行動を非難するような言葉をかけることになる。

S夫はたびたび来ては砂山を崩す。そのたびにK夫は泣く。N先生はしきりにK夫を励まし、一緒に砂山を作ってやる。そして、「Sちゃんも入ればいいのにね。面白いのに」と、側にいる子どもたちに聞こえるように話し、S夫のほうを見ながら彼の行動を言葉で説明する、子どもたちもN先生と一緒にS夫の行動に注目す

る。N先生は「Sちゃんもやる気があるんだ。ほら、裸足になってきたよ」と、みんなに言う。

場面二 友だちと調和して遊ぶS夫

N先生は、ますますK夫と対立を深めていくS夫を誘って、K夫たちとは反対の場所で砂山を作り始める。今まで歩き回ってはK夫の邪魔をしていたS夫が、落ちついてせつせと砂山を作り出す。一所懸命スコップで砂をすくっては山にしていく。すると、近くで遊んでいたA子が、水の入っているボトルを持ってきて、「はい」とさし出す。S夫はそれを受け取り、自分の掘った窪みに水を注ぐ。今度は、Y夫が木の葉を一枚持ってきて、「はっぱはいる？はっぱ」と言う。S夫はその葉をもらって砂山にさす。そして、Y夫に「もう一つ」と、注文する。S夫は真面目な表情で砂山を作りながら、ときおりN先生に笑みを見せる。さっきまでの「険悪な陰しい表情」とは打って代わり、「和やかな表情」になっている。

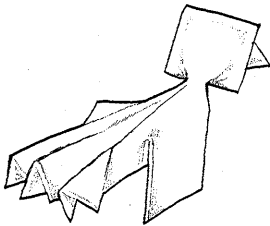
二、出来事における当事者たちの関係

場面一で、S夫がやって来るまで、砂場で遊んでいた子どもたちは、みんな和気あいあいと楽しんでいました。彼らは、全体として「遊び仲間同士の関係」になりました。そこにやって来たS夫も、自然にその関係のなかに入り込みました。ところが、S夫の何気ない行為が、K夫の砂山を崩すことになり、K夫に非難されてしまいました。そのことで、S夫は一気に「他人の砂山を崩した者」という悪者の立場に立たされてしまいました。それまでは、砂場はS夫にとっても「遊びの空間」として居心地がよかったです。悪者にされたことにより、遊びの空間ではなくなってしまう、「居心地の悪い空間」に変わってしまいました。それゆえ、S夫は逃げだしたのです。

この事態に対しては、N先生は、二人お互いを理解させるために、S夫を連れ戻すという仕方に対処しました。この対処はS夫を居心地の悪い場所に無理に連れ戻

すことです。S夫にしてみればN先生がK夫と共に自分を非難する立場に立っているように思われるでしょう。つまり、S夫はK夫とN先生の両者と「対立し合う緊張関係」になってしまったのです。S夫は、突然自分が置かれてしまった悪者の立場からとにかく早く逃れたので、しっかり相手と向き合って話を聞こうとする「真面目な態度」が取れず、「おどけた態度」で、その事態をごまかそうとしました。

N先生は、勿論、S夫一人を悪者にするつもりはな



かったのですが、どうしても気持ちちが崩れているK夫を慰め、支えようとするので、ますますS夫を孤立させ、悪者の立場に置くことになります。S夫にすれば、自分が悪者にされるのは理不尽な仕打ちですから、腹いせにわざと邪魔をするという仕方、K夫に敵愾心をぶつけるようになります。こうして、K夫とS夫はますます

「対立関係」を深めていってしまいました。

場面二になると、N先生はS夫を誘って砂山を作ろうとしました。それまではN先生も、言わば「S夫の敵」のような立場にあったのですが、ここでは一転して、遊び相手として「S夫の味方」になっています。二人は「遊び相手同士の関係」になりました。そのために、S夫とつとの砂場の意味が変わりました。それまでは敵対的な行動ばかりを引き起こす「居心地の悪い空間」だった砂場が、そこに腰を落ちつけ、他者や事物と戯れあえる「遊びの空間」になったのです。S夫の眼前に現れる友だちは、A子にしろY夫にしろ、みんな「S夫に好意をもってくれている者」として現れていますし、S

夫も彼らに好意的な態度をとっています。まだ、K夫とは遊ぼうとしないにしても、明らかにS夫から攻撃的な態度は消えています。S夫と他の子どもたちは「遊び相手同士の関係」になったのです。

三、N先生が実現しようとしたこと

場面一と二では、S夫と他の子どもたちの関係が一変しています。この変化を生んだのはN先生の関与です。

場面一では、S夫とK夫は対立し合っていますから、互いに相いれませんが、K夫がS夫の行為を「砂山を壊した行為」として非難したことで、他の子どもたちもやはり、S夫を悪者としてみています。ですから、「S夫対他の子どもたち」という対立関係が生じてしまっている、と言ってもよいでしょう。

N先生は、このようにみんながS夫を悪者扱いしてしまいうことが、ますますS夫を攻撃的で破壊的にしてしまふうと思ったのでしょう。N先生はこの対立関係を変えようとしています。N先生はS夫の行動を非難することをせ

ず、「Sちゃんも入ればいいのに」と、みんなに聞こえるように言うことで、子どもたちの注意をS夫に向けました。そして、「Sちゃんもやる気あるんだ」というように、S夫の行動を「破壊的な行動」としてではなく、「建設的な行動」として描写してみせました。このように、S夫の行動を建設的な行動として言語化してやることは、子どもたちのS夫への見方を多少なりとも変えることになると思われます。

場面二では、N先生はS夫の遊び相手になるという仕方、S夫に対して好意的な態度をはっきりと示しました。つまり、N先生自身がS夫と「友好的な関係」を結びました。そのことがS夫の態度を和らげ、他者に対して受容的で友好的にしました。この二人の関係は周りの子どもたちをも変えました。S夫が破壊的であったときには、誰も近づいては来なかったのに、A子やY夫のように、好意的な働きかけをする子がでてきました。つまり、周囲の子どもたちのS夫に対する見方が「破壊者」という「否定的な見方」から、「建設的な仲間」という

「肯定的な見方」に変わったのです。

ここでN先生がしたことは、子どもたちの関係を「緊張した関係」から「友好的で親しい関係」に修復するこゝとでした。それは同時に、子どもたちのS夫への評価を「否定的」から「肯定的」に変えることでもありました。N先生はこのことをはっきり自覚して行ったのではないかもしれません。それでも私たちは、N先生のことについてこのような意味を見いだせます。それは、保育において、私たちが無自覚的ではあっても、いつも「友好的で親しい関係」を作り、維持しようとしているからです。

四、子どもたちと保育者の

充実した生を支えている相互性

場面一で、K夫はS夫の行為を最初は許容していましたが、しかし、砂山が崩れるのを見たたん、K夫にはS夫の行為が許容できない否定的なものになりました。一方、S夫にとっては、悪者扱いされることは心外ですか

ら、やはりK夫の行為を受け入れることはできません。

二人の対立が深まるにつれ、K夫にもS夫にも相手の行為は否定的な意味を持つものとして見えてしまっています。

それゆえ、互いに相手を拒否したり、攻撃するというような、否定的なかわり方をするようになります。

場面二で、N先生はS夫を誘って砂山を作りはじめました。それは、N先生がS夫の行動を自分にとって肯定的なものとして見ていますから、N先生の行動を自分にとって肯定的なものとして見ています。二人が共同で砂山を作っているということは「互いに相手の行動が自分にとって肯定的な意味を持ってしまっている」ということです。それゆえ、互いに建設的な仕方でも相手に応答してしまふのです。

S夫とN先生が互いにおいて肯定的な存在として受け止めるようになったことで、S夫と他の子どもたちも互いに同様な受け止め方をするようになります。A子が水の入ったボトルをS夫に差し出したとき、S夫はそ

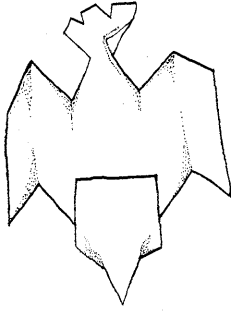
れを受け取りました。S夫がそうしたのは、A子のその行為がS夫にとって拒否すべき否定的なものではなく、肯定的な意味を持つ行為として受け止められたからです。また、S夫がボトルを受け取り、水を窪みに注いだ行為をA子は許容しています。つまり、A子はS夫の行為を自分にとって肯定的な意味を持つものとして受け止めているのです。

S夫とY夫のやり取りにも全く同じことが言えます。Y夫の「はっばいる？」という呼びかけを、S夫は自分にとって有意義な肯定的な行為として受け止めてしまっています。また、S夫の「もう一つ」という注文を、Y夫は肯定的な意味の行為として受け止めています。

このように、場面二における当事者たちは互いに相手を自分にとって肯定的な意味を持つ存在として、自ずから受け止めるようになっていきます。そのように他者が見えてしまうということは、自分が他者を肯定する態度になってしまっているということです。それゆえ、私が相手を好意的に思っていることが相手に伝わってしまうの

ですし、逆のことも起こるのです。このような相互的な関係を「肯定的な相互性」と呼ぶことができますでしょう。逆に、対立し合っている場合には、互いに相手を自分にとって否定的な存在として感じていきますから、「否定的な相互性」が生じていることになります。保育者は子どもたち同士のあいだに、そして自分と子どもとのあいだに「肯定的な相互性」を実現しようとしているのです。

ところで、このように、互いに相手を肯定的に感じて



おり、そのことが相手に伝わってしまうということは、交互に起こっていることではありません。子どもたちや保育者が向き合い、意識し合っただけかかわっているときには、一瞬一瞬において同時に生じていることです。応答するという行動は、時間的なずれを伴い交互に起きますが、互いに相手を肯定する（あるいは否定する）ということは、互いにその存在によって誘発し合うという仕方です、同時に起こるのです。こういう、同時性という相互性が、行動のレベルでの相互性（交互性）の背景になっているのです。

（富山大学）

注

(1) 吉田章宏『子どもと出会う』岩波書店、一九九六年、一九

九八頁